主イエス命名の日　　イエスという名前　　２０２３．１．１．

今日はお正月なので、ちょっとユダヤの数え歌を紹介したいと思います。（数年前に教区報に書きましたが）ユダヤ人は、春の過ぎ越しの祭りの食事の時、ユダヤ教の伝統を子どもたちに教えるのに、いろんな歌を歌うのですが、その中でも、１３まである数え歌は、わたしたちクリスチャンにとっても、旧約聖書を読む上で、大切なことのように思えますので、覚えていてください。

１は誰が知っている？１は私が知っている。１は、天地を造られたわたしたちの神様。
２は誰が知っている？２は私が知っている。２は２枚の石板（トーラーの板）。
３は、３人の父祖。（アブラハム、イサク、ヤコブ）
４は、４人の母たち（サラ、リベカ、レア、ラケル）
５は、モーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）
６は、ミシュナーの６巻（聖書に書かれていない、ユダヤ教の言い伝えの本）
７は、１週間の日数。
８は、割礼は生まれてから８日目。

これが、今日の、主イエス命名の日が設定される根拠になっています。
ついでに加えると、
９は、妊娠の月日は９ヶ月。
１０は、モーセの十戒。
１１は、ヨセフの夢の１１の星。
１２は、イスラエルの１２部族。
１３は、神の１３の性質。「6:主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、7:幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」（出エジプト３４：６～７）

先日のクリスマスイブの礼拝では、マリアさんの妊娠と出産の箇所を読みましたが、マリアへのみ告げの日である３月２５日から９ヶ月で１２月２５日の誕生になるのも、これが根拠なのでしょう。

さてそれで、今日は、福音書の最後にあるように、イエス様が生まれて、８日目に割礼を受けて、「イエス」という名前が付けられたことで、ユダヤ人の一員になられたことを、私たちは今日、記念するわけです。

それで、「イエス」という名前についての、お話を少しします。

マタイによる福音書１章２１節に、主の天使が、ヨセフに現れた時に告げたことばに、こんなのがあります。
『マリアは男の子を産む。その子をイエスと名づけなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。』と書かれています。

イエスというのは、自分の民を罪から救う、救い主の名前だ、と言っているのです。イエスというのは、ギリシャ語的な表現であって、実際にイエス様が生活しておられた時には、「ヨシュア」というふうに呼ばれていただろうと言われています。この「ヨシュア」は「ヤーウェは救い」という意味です。ヤーウェは、神聖な神様の名前のことですね。そして「ヨシュア」というのは、モーセのあとを継いで、イスラエルの民を約束の地へ導いた指導者の名前でもありました。

旧約のヨシュアが、約束の地へ人々を導いたように、新約のヨシュアである、イエス様は、私たちを天国という約束の地へ導いて下さる方だ、と子どもたちへのカテキズムでは教えています。

イエス様が天に帰られた後、弟子たちが伝道して行く、「使徒言行録」という書物の中に、イエス様の名前に関連したことが出てきます。

使徒言行録３章で、ペトロは足の不自由な男をいやすのですが、６節で
「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」と言っています。そして、その人が癒されると大騒ぎになります。

このあと、ペトロとヨハネは逮捕されて、議会で取調べをうけるのですが、その時も、ペトロはイエス様の名前のことを言います。
１０節から「あなたがたも、イスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。この方こそ、『あなたがた家を建てる者にすてられたが、隅の親石となった石』です。ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」と証言しています。

イエスという名前が、罪から人々を救う者として、神様から与えられた崇高な名前であることを、この書物を書いたルカは、伝えているのです。

そして、ヨハネによる福音書では、イエス様ご自身が、御自分の名前のことを言われている箇所があります。皆さん、ご存知でしょう。

１４章１４節「わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」という箇所です。

これを根拠にして、わたしたちは、お祈りをする最後に「主・イエス・キリストの御名によって、お願いいたします。」と言っているのです。

しかし、「名前」が、呪文のように力を持っている、と短絡的に考えるのではなく、イエス様ご自身を表している言葉だと、考える必要があるでしょう。
たとえば「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（マタイ１８章２０節」という場合、「わたしのゆえに」とか「わたしのために」「わたしのことを考えて」といった具合に、イエス様ご自身と密接につながった表現なのです。

クリスマスに読むヨハネによる福音書の冒頭の部分は、１章１４節まででしたが、それに続く箇所、１章１６節には、「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。」という表現が出てきます。「神の言が肉となってこの世に来られたイエス様には、神様の力が満ちあふれている。」という意味です。

「わたしたちが、神様と結びつく、力の源は、このイエス様なんだ。」だから、イエス様にしっかりつながって、天国という約束の地へ連れて行っていただこう、という、その信頼が「主イエス・キリストの御名によって」という表現を生むのです。

生まれて８日目に、イエスと命名されたことは、「イエス様が人々を救う方である」ということ、そしてわたしたちが祈ったり、願ったりしている時、共にいて、力づけてくださる方であることを、年の初めに改めて確認し、イエス様の名前によって、歩みたいと思います。